

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	16H06347	研究期間	平成28(2016)年度 ～令和2(2020)年度
研究課題名	最上部マントルの構造とモホ面の 形成過程の研究～海と陸からのア プローチ～	研究代表者 (所属・職) (令和3年3月現在)	道林 克禎 (名古屋大学・環境学研究科・教 授)

【令和元(2019)年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準	
	A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
(意見等)		
<p>本研究は、陸域及び海域それぞれで、地殻・マントル境界の詳細な構造を明らかにするとともに、両者を比較することを目的としている。</p> <p>陸域ではモホ面を貫通する掘削に成功しており、今後は当初の計画以上の研究成果が期待される。一方、海域での掘削計画・調査航海は公募制ということもあり、計画どおりに進まず、海底班の研究計画が当初のものから大きく変更されていることから、課題全体の中で海域での研究の位置付けがやや不明瞭になっている。</p> <p>個々の研究の進捗状況に凸凹があるものの、研究計画全体としての研究成果は確実に上がっており、総じて順調に進展しているものと評価できる。</p>		

【令和3(2021)年度 検証結果】

検証結果	当初目標に対し、概ね期待どおりの成果があったが、一部十分ではなかった。
A-	海と陸のかんらん岩を採取し、その構造解析や物性測定・岩石水実験を行うことで、最上部マントル構造や地殻-マントル境界の新しいモデルを構築するなど優れた研究成果が得られた。中でも、アラビア半島オマーンオフィオライト岩体の地殻-マントル境界を掘削貫通して連続試料を得たことは特筆に値する。しかし、研究船の公募状況の変化など考慮すべき事情はあるものの、本研究のもう一つの大きな特色であった小笠原海溝の前弧マントル掘削については実現までには至らなかった。